

文学 2011 : 民話ネットワーク・構造・力
(資料 01←『ガイドブック日本の民話』・©米屋陽一・日本民話の会)



1. 民話とはなにか？

1-1. 語りの分類

1-1-1. 民話

民間に伝えられた話をあらわす言葉は、明治以降、昭和の初期までの文献を見ると、民話、民譚、俚譚、口碑、伝説、童話、お伽話、昔話などさまざまでした。

佐々木喜善は世間話という意味で「民話」(1922 年)という言葉を用い、早川章太郎は「民話文学」(1934 年)を用いています。

これとはべつに、英語のフォークテイルが「民間説話」「民俗説話」「民衆の話」などと訳され、その略語として民話という言葉が使われるようになりました。訳語を意識しての使用例は、雑誌「旅と伝説」の「高陽民話」(関数吾・1930 年)が初めと考えられます。

敗戦後、木下順二の「夕鶴」(1949 年)の上演が、民話を題材にしたことから民話劇と呼ばれ、さまざまな分野の人々に大きな影響をあたえました。1952 年には「民話の会」、が発足して、この運動とともに、民話という言葉は一般化していきました。

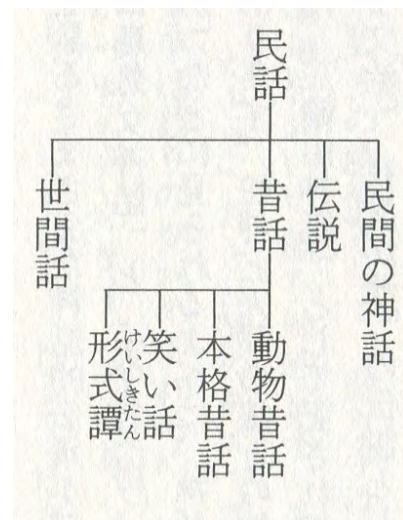
民俗学や口承文芸学で、民衆のあいだに語りつがれた話を、伝説、昔話、世間話などに分類しています。ここではこれをふまえながら、各地に伝わる神話的伝承(民間の神話)や現代も生まれつつある話(現代の民話)をもふくめた、口伝えの話の総称として「民話」という言葉を使います。

1-1-2. 神話

神話は、宇宙、人類、文化などの始まりを説く神々の物語です。神話が生きていた時代には、信仰や祭儀と結びつき、人々の生きかたと深くかかわっていたようです。

日本神話は、一般的には『古事記』『日本書紀』『風土記』『古語拾遺』『延喜式』の祝詞などの古代文献に記録されている神々の物語を言います。とくに「記紀」の神代の巻には、イザナギ・イザナミの二神による国産みや神産み、天の岩屋戸、スサノオのオロチ退治、海幸山幸などの神話が、豊富に見られます。

「記紀」の神話は、国家を統治するために意図的に構成され編纂されたものです。それぞれの物語は、もともとは各氏族の語り部によって口承で伝えられたものでした。それとはべつに、各地にも伝えられていた民間の神話があったと思われます。



現在でも、『遠野物語』第2話に記されている遠野3山への神の鎮座の由来を語る話、各地の「山の背くらべ」「ダイダラハウシ」、東北地方の「赤神と黒神」、沖縄の「雲雀と生き水」など、神々の起源や田平土地、湖沼の起源を語るさまざまな神話的伝承、が伝えられています。

「白鳥処女神話」と「天人女房」、「豊玉姫神話」と「蛇女房」などに見られるように、神話と昔話は深いかわりがあります。蛇神と人間の娘との結婚を語る話、が「記紀」には「三輪山神話」として記されており、民間には「五十嵐小文治」「夜叉が池」の伝説として、あるいは「蛇婿入り」の昔話としても伝えられています。

1-1-3. 伝説

文字を持たなかった時代には、村の起源、事件、年中行事、風俗習慣、信仰などはすべて口伝で、「イツタエ」「イワレ」などと呼ばれる伝説の形をとりました。

伝説は、家や、村の木・石・水・塚・坂・祠堂などの事物に結びつけて語られます。これらの話は、いずれも実際にあったこととして信じられ、人々に伝えられてきました。

- 村の草分けにまつわる長者伝説、落人伝説。
- 鬼、天狗、河童などの妖怪にまつわる伝説
- ごま植えず、きゅうり植えず、鮭食べず、鳥飼わず、餅つかず、鯉のぼりあげず、門松を立てずなど、日常生活にかかわる禁忌伝説。
- 蓬・菖蒲を屋根にふいたり、菖蒲湯に入るなど、行事やしきたりの由来伝説。
- 和泉式部、小野小町、弘法大師、平将門、源義経など、歴史上の實在の人物にまつわる伝説。

そのほかに、築城・落城伝説、沈鐘伝説、機織り淵・椀貸し淵伝説、羽衣伝説、湖沼の主や山の背くらべ伝説、洪水伝説、飢饉伝説、地名起源伝説など、さまざまな伝説が各地に語りつがれています。

伝説には、昔話や神話とかさなる部分があります。動物昔話には、「ホトトギスと兄弟」「カッコウ不孝」などのように小鳥の前生を語るものや、「犬の脚」「くらげ骨なし」などのように動物の起源を語る伝説的な話があります。本格昔話にも、年中行事の由来と結びついている話があります。「蛇婿入り」「食わず女房」と3月節句、5月節句、「天人女房」と七夕、「大歳の客」「大歳の火」と年越しの行事などです。

ダイダラハウシや山の背くらべ伝説は、神話的な伝説です。

伝説を集めて分類したものには、『日本伝説集』（高木敏雄・1914年）、『日本伝説名彙』（柳田国男・1950年）があります。『日本民俗資料事典』（1967年）で関敬吾は、自然伝説・歴史伝説・信仰伝説の3分類案を、『日本伝説大系』（1992年）で野村純一らは、自然説明伝説（自然の起源）・文化叙事伝説（超自然の事業）の11分類案を示しました。

1-1-4. 昔話

昔話は、架空の人物登場をさせ、時代を特定せずに話られる空想的な物語です。本格昔話、動物昔話、笑い話、形式譚などがふくまれます。

土地によって「ムカシ」「ムカシコ」「ムカシガタリ」「ザットムカシ」「トントムカシ」などと言われています。このようにさまざまな呼称のある話をまとめて、柳田国男は「昔話」と呼びました。

形式上の特徴として、語り手は冒頭に「ムカシ」という発端句をおいて語り始めます。そして「あったそうな」「あったとさ」など伝聞の形式で語りはすすんでいきます。聞き手は語りの切れめ切れめに、語り手の求めに応じて、あいづちを打ちます。そのあいづちにも、「オットー」「サーソ」「ハーレヤ」などと地方的な特色があります。

この語り手と聞き手との相互のやりとりの中で、語りは成り立っています。聞き手はいつしか虚構の世界にどっぷりとつかってしまうのです。

話の終わりに、語り手は「どっとはらい」「いちごさかえた」などと、結末句をつけて語り納めます。この言葉によって、聞き手はふたたび現実の世界に引きもどされるのです。

このような昔話につく発端句、結末句、あいづちは、本来は本格昔話につけられていたと考えられます。

日本の昔話には、代表的な2通りの分類方法があります。1つは、柳田国男、が『日本昔話名葉』（1948年）で示したもので、「完形昔話」（本格昔話）と「派生昔話」（動物昔話、笑い話）という分類です。

もう1つは、関数吾が『日本昔話集成』（1950～58年）とその補正の『日本昔話大成』（1978～80年）で示したもので、「動物昔話」「本格昔話」「笑い話」「形式譚」の4つに分類し、伝説や語り物との中間的な話を「補遺」としました。これは、フィンランドの民俗学者アアルネの『昔話の型目録』（1910年）を参考にしています。

アメリカのトンプソンは、アアルネの仕事を引きついでフィンランドのクローンの協力を得て、『昔話の型』（1928年）を完成させました。そして、「昔話の型索引」の増補改訂（1961年）をし、一つ一つの話型に番号をつけました。これは、アアルネの頭文字Aとトンプソンの頭文字Tを取って「A・T番号」と呼ばれ、現在、昔話の国際比較に役だっています。

1-1-5 世間話

世間話は、日常生活の中で交わされる珍談、奇談、怪談、笑い話、艶笑譚など、人や家や村についての巷談、うわさ話の全般をさします。くりかえし話され戎芦ので、井戸端会議での話のような1回かぎりで消えていく話とは一般には区別されます。

狐火・狐平狸に化かされた話、蛇に見こまれた話、大入・河童・天狗・幽霊・火の玉・ひとだまに出会った話、大食・大力の話、家・人のあだ名の由来などがあります。体験談、伝聞談のような身近に起こった出来事として話されます。

かつての村々には、六部、山伏、遊行聖、瞽女、座頭などの宗教者・旅芸人や、行商人、ばくろう、子守、作男など、ほかの村からさまざまな人々が訪れてきました。これらの人々は、各地の情報や話を村にもたらししました。村人たちは自分たちの村の生活と、ほかの村や町の生活をくらべたりして、おおいに好奇心を満足させました。

村から外に出て仕事をする職人、奉公人、世間を渡り歩いた世間師、旅人なども、貴重な情報、話を提供してくれました。これらの話がいろいろ犀に持ちこまれ、その土地に定着し、世間話として花開いていったのです。

このような世間話を、村内の話（ムラバナシ）と、村外の話（セケンハナシ）の2つに分けて考えることもできます。

柳田国男は「世間話の研究」（1931年）『民間伝承論』（1934年）『口承文芸史考』（19回7年）などで、世間話と昔話、伝説との関係や比較検討をすすめました。近年になって世間

話の記録・研究がすすみ、分類案も試みられています。

現在では、かつての村々での話ばかりでなく、都市や学校の世間話も注目されています。

「密造酒」「にせ汽車」「タクシー幽霊」などの話は、「現代の民話」とも呼ばれています。

1-1-6. まとめ：神話・伝説・昔話

ここで、「神話」「伝説」「昔話」という民話（口伝えの物語り）の3つの大きなジャンルの特徴を整理していきましょう。

1. 神話とはなにか？

- ①真実であると信じられている報告（物語）である。
- ②創造的原古であって、このときすべての本質的なものが基礎づけられ、今日の事物や秩序が作られた。
- ③存在するものを単に説明するだけではなく、基礎づけ、証明するものである。
- ④神話に語られる原古の出来事は、今日でも語る者と聞く者の関心の対象であるから、その意味で時間をこえている。

2. 伝説とはなにか？

- ①舞台はだいたい確定した周知の場所である。
- ②創造的原古であるよりも、それより後の歴史的な過去の時代である。
- ③登場人物も歴史的に実在した人物と考えられる。
- ④真実であると考えられる物語である。

3. 昔話とはなにか？

- ①本質的に娯楽的な、しばしば詩的な説話であって、呪術的・宗教的な世界（他界）から発する奇跡の要素を応用することによって生ずる「劇的なヤマ」がある。
- ②神話のような真実をもたず、世界観とは直接関係のないことが多い。
- ③原古における一回的な過程を描くのではなく、どこでもいたるところで、あらゆる身分の典型的な人間によって体験され、成功するような典型的な出来事を描く。

1-2. 昔話のいろいろ

1-2-1. 本格昔話

人間を主人公とする複雑な構成を持つ昔話です。誕生から成長、成人、結婚、富や幸の獲得、子孫の繁栄というように、主人公の一生や成長の過程が語られます。

子のない爺婆に、水神さまの申し子としてさずけられたたにしが、知恵を働かせて長者の娘と結婚し、最後に人間の姿に変身して、幸せに暮らす「たにし長者」は、そのよい例です。「桃太郎」や「一寸法師」でも、ふしぎな誕生をした主人公が、一つの仕事をなしとげ、一人前の人間として成長するまでが、一代記のように語られます。

正月や節句のような一年間のたいせつな年中行事と深くかかわる話もあります。

「蛇婿入り」や「食わず女房」では、5月の節句に菖蒲や蓬を屋根にさす由来を語ること、があります。「笠地蔵」や「大欲の火」には、年の暮れの生活や信仰、が語りこめられています。

本格昔話は、親子、兄弟姉妹、継母継子、隣人との対立、人間と動物・植物とのふれあいなど、人間社会の美しさやみにくさを語りながら、人生のさまざまな教訓を伝えます。

村々では近年まで、子供たちにこれらの話を語り聞かせました。子供たちは、さまざまな運命の主人公を自分白身とかさねあわせ、心の成長の糧としていったのです。

1-2-2. 動物昔話

動物を主人公とする昔話です。まれに植物が主人公の話もあります。

登場する動物たちは、人間とおなじように言葉をかわします。あたかも人間の社会を動物の社会にたとえ、風刺しているかのようです。話の中には、動物の起源、姿、形、習性や自然界の細部にわたる祖先たちの観察が、こまやかに語りこめられています。

「ホトトギスと兄弟」や「カッコウ不孝」では、小鳥の鳴き声の由来として前生が語られます。「くらげ骨なし」や「犬の脚」では、動物の姿や習性の由来が語られ、神話、伝説の世界と共通しています。

現在語られている動物昔話の多くは娯楽的であり、教訓的ですが、かつての狩猟採集の時代には、生活に密接にかかわる意味が盛りこまれていたとも考えられます。

近年までの村々では、身のまわりの動植物に興味を持ち始めたおさな子たちに、これらの話が語られていたようです。

1-2-3. 笑い話

笑わせることをおもな目的として語られる話です。本格昔話とおなじように、人間も動植物もさまざまな形で登場します。

多くは、日常生活での身近なことがらが題材になっており、話は短くまとめられ、笑いの部分に重点を置いて語られることが多いようです。世間話のように現在のことが自由に語られますから、その数も多く、大人にも子供にも広く愛されています。

「和尚と小僧」や「吉四六話」などの「おどけ者話」「とんち者話」では、力の弱い立場の者が強い立場の者をやりこめます。社会的に身分の低い者が高い者をやりこめたり、みずからをおどけ者にして笑いをさそったりして、主人公の知恵の勝利を語り、痛快な笑いを提供します。

「おろか村話」「おろか者話」では、無知や時代遅れや文化的なちがいによって生じる主人公の失敗を語りながら、笑われる側のしたたかさも感じさせます

1-2-4. 形式譚

昔話をせがむ子供たちを、うんざりさせたり、はぐらかしたり、あきらめさせたりするために語られる短い話です。語り手が聞き手にしっかりと聞き耳をたてさせ、語りの場の雰囲気を作るために語られたりもします。本格昔話、動物昔話、笑い話とは異なり、話の内容よりも、語りのリズムや言葉遊びのおもしろさなどに重きを置いて語られます。

つぎの話は、洒落やかけ言葉をたくみに使った話です。聞き手をはぐらかす場合に語られたりします。

【むかしと話と謎】

「むかしと話と謎が旅をした。大風がびゅうっと吹いたら、むかしはむくつとして、話のはじけて、謎はながされた」

【むかし刀】

「むかし、それはそれは長い刀をさした侍がいた。それはなんだときいたら、むかしがたんな（むかし刀＝むかし語んな）」

【はなし】

「お婆さんが大口をあけて笑った。口の中を見たら歯がなかった。それで、はなし」

「うらの大根畑へ行ったら、葉っぱが一枚もなかった。それで、はなし」

「葉っ切り包丁の刃が、ぼろぼろにかけてしまった。それで、はなし」

【はなすな】

「丸木橋の上で、子供が足をすべらした。爺がつかまえたが、自分のほうが落ちかかり、片手で橋につかまった。手がだんだんくたびれてきた。はなそうか、はなすまいか」

……ここで聞き手が「はなせ」と言えば「流れていった」と語り、「はなすな」と言えば、「これで終わり」ということになり、いずれの場合も語りの場はとじられます。

本格昔話に入る前や語りの終わりに、「長い話がいいか」

長い話と短い話

「短い話、がいいか」聞き手にえらばせることもあります。

【短い話】

「むかしむかしあったとき。あるところには、蟻ごの糞があったとき。ねいところには猫の糞があったとき。それっきり」

【長い話】

「むかしむかしあったとき。天から長いふんどしがさがったとき。たぐってもたぐってもたぐりきれねいとさ。たぐってもたぐってもたぐりきれねいとさ。……これが長い話、それっきり」

【終わりのない話】

つぎの話は終わりのない話ですが、この話もふつうは最後に語る昔話としての役割があります。子供たちは、つぎからつぎへと昔話をせがみます。それにこたえて話っていては、つかれてしまいます。そんなときには、「はてなし話」「きりなし話」をゆっくりと語り始めるのです。

【はてなし話、きりなし話】

「むかし大蛇がいた。長くて長くてむこうの山からこっちの山まで、のろのろのろのろと行った。今日ものろのろ、明日ものろのろ……」

「大きなとちの木があつて、実がたくさんついたと。風がビューッと吹いたら実が一つ川に落ちて、ポ。チャン。また風、がビューッと吹いて、また実、が一つ川に落ちて、ポッチャン……」

おなじ内容をくりかえし語るわけですから、子供たちの目はいつのまにかくつついてしまいます。あるいは、いやけがさして催促をあきらめてしまいます。これらの話も、語りの場の最初に語られる場合があります。

1-2-5. おろか村話

町から遠く離れた村や山の中の村には、あたらしい品物や最新情報がなかなか入ってきまかでした。ですから、村人たちがときおり町に出たり、あるいは、町から客をむかえたりしたときなど、風俗習慣や言葉のちがいなどから、おたがいにとんちんかんな行為をして笑いをさそうところがありました。

話の世界にも、町方から見た村人たちの文化的なちがいから生じる行為を笑いの対象にしたものがあり、それら一連の話を「おろか村話」と呼んでいます。おろか村話は、特定の地名と結びついていて、南山話（福島県）、増間話（千葉県）、秋山話（新潟県）、佐池谷話（鳥取県）など、全国的 40 か村にまつわる話があります。

話の内容は全国ほぼ共通しており、その村の周辺の地域に語りつがれています。これらの村は、平家の落人伝説と結びついている場合もあります。

「ネギをもて」では薬味のネギと神社の禰宜（神官）をまちがえ、「手水（ちょうず）をまわせ」では手水と長頭をまち、かえ、「茶の実」では茶の実と茶飲みの爺婆をまちがえるなど、言葉知らずによる失敗を笑います。元結（または線香）を煮て食べる「もとゆいそめん」や「もくれろうそく」「ろうそくかまぼこ」などでは、食べ物知らず、食べかた知らずを笑います。

町の人々も村の人々もこれらの話を聞いたり語ったりしながら、他人ごととして腹をかかえて笑ったのでした。

おろか村話の中には、村人がわざと愚人をよそおって町方の人を笑ってしまったたかな話もあります。おろか村話は、町と村のどちらの側に立つかによって、語の意味が逆転しそうです。

1-2-6. とんち者話

封建的な身分社会の中で、地位も財産もない底辺の人間（奉公人、作男など）が知恵を働かせて、殿様やだんなさま（名主・庄屋）や町衆をやりこめてしまったり、どうどうと仕事をなまけたりする一連の笑い話があります。これを「とんち者話」「おどけ者話」と呼んでいます。

これらの話は特定の地域と結びつき、実在人物の話として、親しみをこめて語られるのがふつうです。実際にその人物の墓があったりもします。

北海道・繁次郎（しげじろう）

山形県・佐兵（さひょう）

長野県・ウキサ

石川県・三右衛門（さんにょもん）

千葉県・重右衛門（じいむ・じゅえむ）

京都府・きんだはん

広島県・左衛門（せえもん）

高知県・泰作（たいさく）

熊本県・彦一（ひこいち）

大分県・吉四六（きっちよむ）

鹿児島県・洙儒（しゅじゅ）どん

沖縄県・モーイ親方

話の内容は、全国ほぼ共通しています。主人公は、おろかな面と狡猾な面との両面をかねそなえ、抵抗の姿勢をつらぬいたり、なまけ者とか愚人とか言われながらも高度な生産技術を身につけていたりします。

とんち者語の主人公には、しいたげられている人々の願望が託されているようです。

江戸川の流域、東京湾沿岸の農漁村には、「重右衛門」の話が語りつがれ、親しまれています。

じゅえむが餅を焼きすぎ、まっ黒にこがしてしまいます。だんなさまは「餅は遠火で焼くものだ」と、じゅえむをしかりつけます。あるとき、江戸川の川むこう（江戸）が大火事になります。じゅえむは家から餅をはこびだして、土手にならべます。だんなさま、が「なにをしているのだ」と言うと、じゅえむは「餅は遠火で焼くものだ」とだんなさまのかつて言った言葉をなげかえします。（「餅は遠火で」）

このじゅえむは、印内（船橋市）で生まれ、北方（市川市）の名主、久兵衛の家で作男として働いたと人々は語ります。

1-2-7. なぜ話（由来話）

昔話の中には、動物、植物の姿、形態、鳴き声などの起源や、行事の由来を語る話があります。これらの昔話は、神話、伝説の世界と共通しており、「なぜ話」と呼ばれています。

- 猿の尻（顔）はなぜ赤いのか。（「古屋のもり」）
- くらげにはなぜ骨がないのか。（「くらげ骨なし」）
- 蛙は雨、が降りそうだとなぜ鳴くのか。（「雨蛙不孝」）
- そばの茎はなぜ赤いのか。（「瓜子姫」「天道さん金の鎖」）
- 5月節句にはなぜ菖蒲湯につかるのか。（「蛇婿入り」「食わず女房」）

昔話から出て、日常の生活の場で生きている言葉や俗信もすくなくありません。

- 大火をたけば福や金がさずかる。（「大歳の火」）
- まむしにあったら「まむしまむし、わらびの恩を忘れ
たか」と言えばかまれない。（「わらびの恩」）

小鳥の前生を語る一連の昔話には、鳥の鳴き声を人間の言葉にうつして聞く「聞きなし」が盛りこまれています。たとえば、「ホトトギスと兄弟」では、ホトトギスの鳴き声をこう聞きます。

- ホンゾンカケタカ（本尊掛けたか）
- オトハラツッキタ（弟腹突っ切った）
- オトウトコイシ（弟恋し）

「聞きなし」とともに、「ホトトギスが鳴けば山芋を掘れ」「ホトトギスが鳴いたら田植えだ」というような俗信あるいは自然暦も語られます。

「炭とわらと豆」「犬の脚」「ふくろう紺屋」「たばこの起源」「ほおずきとまりほおずき」など、動物や植物の由来を語る一連の昔話もあります。これらの話も「なぜ話」と考えられます。

なぜ話には、「なぜそうなのか」という由来、が全体にわたっている話と、結末に付けくわえられるだけの話とがあります。

1-2-7. なぞ話

謎を盛りこんで語る一連の昔話を「なぞむかし」または「なぞ話」と呼んでいます。謎と昔話、あるいは語りの場とは、古くから深い関係にありました。

「節季ナンズの春ムカシ」（新潟県）ということわざがあるとおり、12月末など、季節の

終わりの節季には謎かけをし、正月には昔話を語るものだと伝えられてきました。

鹿児島県種子島では、なぞ話を「イイキリムカシ」、奄美大島では「イイキリムンガタレ」（ひと口で言いきって答えがわかる昔話）と呼んでいます。群馬県 水上町などでは、子供たちに「なぞ話ってやる」と言います。

謎かけ・謎ときの興味は、昔話の中にも組みこまれています。

「西と東に分かれて、蜂とアブが相撲をとっていました。どちらが勝ったでしょう」
ここで語り手は時間をすこしとります。そして、「二四（西）が八（蜂＝勝ち）で、西が勝ち」と西が勝った謎をとき、しめくくります。これは、鳥取県に語りつがれた「蜂とアブの相撲」という「なぞむかし」で、謎かけ・謎ときのみで話ができあがっています。

「化け物問答」「卸問答」では、寺に化け物が出て、「ショウソクハッソクダイソクニソク（小足8足大足2足）」と、旅の憎に謎かけをします。僧はその謎をとき、「蟹」と答えます。とたんに、蟹の化け物は姿を消し、僧は寺の住職になります。

「絵姿女房」では、「1石6斗のはと」という謎かけを、「はとが2羽で8斗8斗」となきます。「播磨糸長」では、娘の残していった謎をといた主人公が、長者の婿になります。

そのほか「うばすて山」「謎とき婿」「化け物寺」「宝化け物」「庚申待の謎」などの昔話でも、謎が重要な役割をはたしています。

1-2-8. 小さな話（ひと口話）

昔話には、ほんのひと口で語り終える小さな話がたくさんあります。同音異義語がたくみに使われ、子供たちは言葉遊びをしながら話を楽しみ、言葉をゆたかにしていぎました。

【靴の中はきゅうくつ】

お婆さんが川で洗濯していると、川上から大きな靴が流れてきました。そこへ、きゅうりが流れてきて、その靴の中に入ってしまう、「きゅうくつ、きゅうくつ」と言いました。

【猫の正月】

お正月なので猫にあたらしい首輪をしました。「この首輪、にあうかな、どうかなあ」って言ったら、猫が返事しました。「にやううー」

【くさかった】

むかし、あるところに爺さんと婆さんがおりました。あるとき、爺さんは山へ柴刈りに、婆さんは川へ洗濯に行きました。すると、川上から大きな芋が流れてきました。婆さんは、その芋をひろって家に持ち帰り、一人で食べてしまいました。するとボンボン、ボンボン、婆さんはおならがとまらなくなってしまうました。そうしたら、爺さんは山で柴を刈らずにくさかった（草刈った）そうです。

【犬と茶碗】

むかし、犬と茶碗が旅に出ました。犬のあとがら茶碗がころころ、ころころと、ころがっていきました。そうしているうちに、犬の足に茶碗がぶつかってしまいました。犬は「ワン、ワン」とほえました。すると、茶碗は、「ワンではない、茶碗だ、茶碗だ」と言いました。こう言いながら旅をつづけました。

これらの小さな話は、いつでも、どこでも、だれにでも簡単に語ることができるので、

とても人気があります。また、語るたびに、その場にいる人の心をやわらげ、楽しい雰囲気をつくりあげる力があります。そんな話を聞いた子供たちはすぐにおぼえて、こんどは自分か小さな語の語り手になります。

1-2-9. 五大昔話

「挑太郎」「猿蟹合戦」「舌切り雀」「花咲か爺」「かちかも山」の5つの話を、一般的に五大昔話、五大お伽話と呼んでいます。

これらの話は、江戸時代には「赤本」と呼ばれている子供むけの絵本などにくりかえしとりあげられました。江戸後期には、お伽話・昔話の標準のように考えられ、いつしか五大昔話と呼ばれるようになりました。

したがって、これは、語りつがれた昔話の代表という意味ではありません。

江戸時代の『桃太郎費がたり』の子供絵本を見ると、語りの場、読み聞かせの場の雰囲気が伝わる絵や言葉がそえられています。これらの話は、絵本などをとおして都市を中心に広がっていきました。

さらに明治時代には、教科書や小学唱歌にとりいれられたり、巖谷小波の『日本昔噺』『日本お伽噺』などによって全国の子供たちの手元にとどけられました。お伽口演・口演童話の語り手、幼稚園、小学校の先生たちによっても子供たちに話られました。このようにして、五大昔話は、村々での口伝えの昔話とは異なる方法で、ますます子供たちのあいだに広まりました。

2. 語りの形式

2-1. 語りの場

昔話は、古くは、大歳、正月、祭り、日待ち、月待ち、出産、通夜など、神々と人々が出会う神聖な特別な日、ハレの日に語られていたようです。そういうハレの日には、ハレのごちそうが用意され、ハレがましい姿で神々の前へ行きました。語り手は神々の代理者として語り、聞き手も厳粛な気持ちで語りの場にのぞんだようです。

このような語りの場のなごりが、昔話とともに受けつ、がれてきました。語り手によっては、語り始める前に身だしなみをきちんと整えてから、聞き手の前に姿をあらわしたり、一礼してから語り始めたりしました。また、かしわ手を一つポンと打って、語り納めた語り手もありました。

柿の皮をむきながら、ひしゃくを作りながら、収穫した煙草の葉をのばしながら、竹細工・わら仕事をしながら語ったように、家内労働の場も語りの場になっていました。

お爺さんお婆さん、お父さんお母さん、が子供たちに、寝床、いりろ端のようなこいの場でも語りました。

2-2. 語り始める前に

昔話の語りの場は、語り手と聞き手がいて、初めて成り立ちます。いちだんと古い語りの場では、語り手はその場にのぞむための宣言を、語り始める前に聞き手に言いわたしました。このことをいも早く紹介した早川章太郎は、『古代村落の研究』（1934年）で、鹿児島県黒島の例をあげています。

「さるむかし、ありしかなかりしかしらねども、あつたとして聞かねばならぬぞよ」という言葉で、「いまから語ることは、ほんとうにあつたことか、なかったことかは、私は伝え聞いただけなので知らないけれど、事実あつたこととして聞かねばならないぞよ」と、語り手は聞き手に強く要求したわけです。

この言葉は、長いあいだ一例のみで、まぼろしの言葉のようでしたが、昭和 40 年代になってから同系統の言葉が、大隅・薩摩半島などからつぎつぎに報告されました。

山形県最上郡からも、つぎのような言葉が報告されています。

「トントむがすのさるむがす。あつたごんだが、なえごんだつたが、トントわがり申さねども、トントむがすアあつたごとえして聞かねばなんねエ、え」

このような昔話に付随する言葉からも、かつての語りの場が単なる娯楽の場としてあつのではなく、「むかしを語る」儀礼的な、神聖な場としてあつたのだということが伝わってくるようです。

2-2. 語り始め

昔話はいくつかの形式にのっとして語りつがれています。語り手は、語りの開始を意味する特定の言葉を言います。これを「語り始め」または「発端句」「冒頭句」と呼んでいます。

語り手は、いつのことだかわからないけれども、とにかく、「むかし」のことだよ、と語り始めるのです。この語り始めの言葉は変化にとみ、各地にさまざまな形で語りつがれています。

- むかしアあつたじおんなア（青森県）
- むかしあつたずもな（岩手県）
- とんとむかし（山形県）
- まずむかしがあつたとさ（新潟県）
- むかしあつたんやってなあ（岐阜県）
- むかしむかしあつたんじゃ（滋賀県）
- なんとむかしがあつたげな（岡山県）
- とんとむかしあつたいいますらい（愛媛県）
- むかしかたりじゃ（宮崎県）
- ちょーんとむかしやつたといいが（鹿児島県）

「むかし……」という言葉は、語りの場にはなくてはならぬものでした。それは、現実の世界と異なる世界へ、語り手と聞き手とがいつしよに入ることの意味する重要な役割を持つ言葉なのです。語り手が「むかし……」と語り始めると、聞き手は昔話の世界に引き込まれていきます。そして、いつしかゆたかな語りの世界で、語り手とともに遊び始めるのです。

2-3. 語りのリズムとあいづち

昔話は語り物の一種として、形式にのっとしてきちんと語りつがれてきました。語り始め、語り納めの言葉とともに、語りの切れめ切れめに、「げな」「そうな」など伝聞をあらわす特定の言葉が使われてきました。

この言葉は、それぞれの土地の日常の言葉が長い年月のあいだにみがかれ、その土地の独

特な語り目になっています。

- むかし、爺と婆があっただけな
- 娘が3人おったそうな
- 兄と弟があっただてんがの

というぐあいには、語り手が語ります。すると、聞き手はその一句切れごとに、あいづちを打つのです。「うん」「ふん」「はい」はふつうですが、

- 「ハハーレヤ」「ゲン」「ゲイ」(宮城県)
- 「ハート」「口にえぼしハア」(岩手県)
- 「オットー」(山形県、岐阜県)
- 「サァーソ」「サァーンスケ」(新潟県)
- 「フントコショ」(群馬県)
- 「ヘント」(石川県、岐阜県)

など、独特な、しかも語りの場のみでしか使用されないあいづちを打つのです。

語り手：むかしあっただてんがの

聞き手：サァーンスケ

語り手：じさとばさがあっただてんが

聞き手：サァーンス

というふうに語りはすすんでいきます。この「……てんがの」が、「聞いているのか」というあいづちの要求であるならば、あいづちは、「聞いているよ」という返事であると言えるでしょう。

語り手は、あいづちを打だないと語らないのがふつうでした。また、語りが気に入らないときには、聞き手は「サソヘソデペソ、デングリベソカヤッタ」(新潟県)とはやしたり、語りが停滞すると、「フンフンフンノフン」(長野県)と言って話の先をうながしたりしました。

このように、語り手と聞き手とのやりとりは、両者の心をしっかり結びつけるばかりでなく、語りのリズムをきちんと整えるうえでだいじな役割をはたしているのです。

2-4. 語り納め

昔話の語りが一つ終わるときに、語り手は「これでおしまい」という意味を示す特定の言葉を言います。これを「語り納め」または「結句」「結末句」と呼んでいます。これは、語り始めの言葉と対をなすもので、昔話の形式のうえからも重要な言葉として注目されています。

- どっとはらい (青森県)
- とっぴんばらりのふう (秋田県)
- と一ぴんと (山形県)
- いちがさかえもうした (福島県)
- いちごぶら一んとさがったてが (新潟県)
- しゃみしゃつきり (岐阜県)

- むかしこっぷり（岡山県）
- そうらえばくばく（香川県）
- もうすこんこん米んだんご（大分県）
- そしこんむかし（鹿児島県）

これらの語り納めは、2つの系統に分けて考えることもできます。その一つは、神聖な尊い昔話そのものが語り終わったので、「尊払い(とうとはらい)」「尊かれ」と語り納め、れが「どっとはらい」「どんどはれ」「とっちばれ」などに変化したというものです。

もう一つは、主人公がめでたい結末をむかえたので、その人物の「一期がさかえた」と語り納め、それが「いちがさけた」「いきがさけた」「えっちごさつけ」などに変化したというものです

2-5. 百物語

夜、人々が部屋に集まり、百本のろうそくに火をつけます。一入が怪談を一つ語り終えると、一不の火を消します。語りがすすむにつれて部屋の中はしだいに暗くなっていきます。このような怪談の語りの形式や語を「百物語」と呼んでいます。

「昔話を百語ると、化け物が出るから語るな」「百物語をすると化け物が出る『』」「百物語をするとせなこうじ（背あて）がおどりだす」というように、百語ることの禁忌が語りの場には伝わっています。

江戸時代の『御伽嫡子』にも、「昔より人の言伝えし怖ろしき事、怪しき事を集めて百語（ものがたり）すれば、必ずおそろしきこと、怪しきことありと言えり」と記されています。

新潟県で記録された「百物語」の昔話には、毎年、歳夜の晩に村の衆が一軒から一人ずつ出てお宮さまに集まり、百むかしを語って歳徳神さまを迎えるならぬしがあった、と語られています。

このような例からも、古い時代には、百語る儀礼的、信仰的な特別の日があったのではないかと想像することができます。

現代では、とくに若い人たちのあいだで、夏の夜のレタリエーションの一つとして、百物語の会がもよおされており、きもだめし、お化け屋敷とならんで人気があります。

2-6. だんだん語り

語りの場に散人が集まり、一人ずつ順番に語り手となって語っていきます。これを「だんだん語り」と呼んでいます。これは交互に語を語りすすめていく「めぐり物語」の形式であり、『古事談』『古今著聞集』『大鏡』などの古い文献にも見られます。

青森県下北郡似付町では「ぼかーん、一つ、かしたずもなあ」「ちんぷんかあーん、一つ、かしたずもなあ」と語り納めます。そこには、「私が昔話を一つ語ったのだから、聞き手のあなたがたに一つ貸しましたよ」という意味が込められています。

宮城県玉造郡鳴子町の「これで一つきまったね」、新潟県岩船郡一帯の「つづきそうろう」「つつきそうろう」という語り納めの言葉も、昔話をこれ一つで終わらせるのではなく、つぎつぎに続けていくという意味があるようです。

だんだん語りは、大人どうしの語りの場だけではなく、子供どうしてもおこなわれていました。村の子守たちが7、8人お堂に集まって、おぼえたての昔話を「つぎはおまえ語れ」と言ってつぎつぎに語り合った地方があります。また、こよりに火をつけてまわしながら語ったという地方もあります。そのほかにも、線香、ろうそく、小枝に火をつけて、その火が消えたら語るという語り合いも各地から報告されています。

このような「火渡し」「火まわし」や「百物語」も、だんだん語りの一種と考えられます。

2-7. 昼むかし語ると……

「昼むかし語ると、ねずみに小使しつけられる」「昼むかしは、ねずみが笑う」「昼間むかし語ると、ねずみが着物コかじる」など、昼間に昔話を語ることがをいしめた言葉として、昔話とともに伝わってきました。昔話の禁忌（タブー）の一つです。

そのほかにも、昼むかし語ると、「鬼、が笑う」「お寺の鐘がわれる」「なべのふたがこわれる」「裏山がくずれる」「天井から血のたれる片足がさがる」「夏に雪が降る」「赤い雪が降る」などがあり、いずれもありえないこと、ふしぎなこと、不吉なことが起こると言われています。

禁忌にねずみが多く登場するのは、夜行性のねずみは、別世界にいる神さまの使者として、人々に福をもたらす動物だと信じられてきたからでしょう。

大人たちは昼間は野良仕事をしているので、昔話を語っているひまなどあるはずがありません。ところが、子供たちはそんなことにおかまいなく語りをせがみます。そのときに、「昼むかし語ると……」と言って相手にしなかったわけです。

この言葉は、昔話が夜に話られていた、ということを教えてくれます。

これから夜になるという、ほんのりうす暗いときを「逢魔が刻」と呼んでいる土地があります。この時刻からは、魔物が活躍する時間帯です。夜語りすることによって、魔物を退散させることができると信じられていた時代があったのかもしれません。

「話はお庚申の晩」とも言われます。庚申・甲子・巳の日、正月・5月・9月の1日・15日の神祭りする日などの日待ちや、17夜、19夜、23夜などの月待ちなどの特別の日に、昔話は夜どおし語りつづけられていたのでしょう。

これらの禁忌は、娯楽化した語りの要求に対する拒否の意味だけではなく、本来、昔話を語っていい日時を示していたと推測することができます。

このように、昔話とともに伝えられた「昼むかし語ると……」の禁忌からは、語りの場のより古い姿をかいま見ること、ができるようです。

2-7. 語り爺さと語り婆さ

昔話を語る人を、昔話の「語り手」、もしくは「話者」と呼んでいます。その中に、数多くの昔話を記憶しており、しかも語りの形式をきちんとふまえている語り手があります。百話、二百話、五、六百話というぐあいに、話を忠実に記憶し、語り部とても呼ぶにふさわしい語り手を「語り爺さ」「語り婆さ」などと呼んでいます。

村々にはすこし前まで、半職業的な語り手の語り爺さ、語り婆さがたくさんいました。さらにさかのぼれば、正月や祭りなどのハレの日に村の中で昔話を語ることのできる特別な

資格が、とくにすぐれた語り手にはあたえられていたのかもしれませんが。村人たちは、語り爺さ、語り婆さの語る昔話に長いあいだ信仰的な意味を持って期待し、耳をかたむけていたのでしょう。

雪国の子供たちは、雪が降りつもと、村の語り爺さ、語り婆さの家にお重や菓子、果物を持って「むかし語ってけろ」「むかし教えてくろ」と言って聞きにいったということです。秋田県ではほかの村から語り爺さがやってきて、子供からを集めてしばらく語りつづけた後、「とんぴんぱらりん、さんしょうの実、さんしょうがなったらまた語る」と言って帰っていったそうです。

2-8. 伝承と伝播

昔話が語り伝えられる方法には、二とおりありました。

その一つは、家の中で語りつがれる方法です。これを「家の伝承」と呼んでいます。いろいろ端や、寝床で、祖父母が孫たちに語ったり、父母がっぎの世代の子供に語りしました。

もう一つは、村の中で語りつがれる方法です。これを「村の伝承」と呼んでいます。村内の語り爺さや語り婆さが子供たちに語ったり、遊び仲間、子供組、若者組、娘組のような古くからの年齢集団の中や仕事場で、おたがいに語り合ったりしました。このようにして昔話を伝えた人を「伝承者」と呼んでいます。

そうした伝承に対して、村の外から村内に昔話が持ちこまれ、根づいていく場合や、昔話が村の外に出ていく場合があります。これを「伝播」と呼んでいます。また、それらの昔話をはこんだ人のことを「伝播者」と呼んでいます。

村を訪れる人々は、贅女、座頭、六部、祭文語り、山伏、僧侶などの宗教者や旅芸人、屋根ふき、大工などの旅職人、麴屋、薬屋、魚屋、ざる屋などの行商人、乞食などさまざまです。

これらの人々を村人たちはこころよく受け入れ、でぎるかぎりのもてなしをしたのです。ですから、語り手たちは、宿泊や歓待へのお礼の気持ちとして、歌をうたったり、昔話や各地のめずらしい話を語ったりしました。

各地で語りつ、がれた昔話は、伝承と伝播のくりかえしによって、現在にいたったと言えるでしょう。

2-9. 昔話の記憶法

昔話の記憶は、語り手が聞き手であった子供時代の年齢と深いかわりを持っています。かつての村々の語り手たちは、子供の年齢にふさわしい昔話をえらび、興味を持つように工夫をこらして、くりかえし語ったのでした。

発端句や結末句、語り口調、リズム、くりかえし、擬声語、擬態語、きまり文句、問答形式、歌、教訓などが、しだいに子供たちにしみついていきました。言葉を修得するだいたいの時期にくりかえし昔話を聞くことによって、子供たちはそれぞれの場面を想像し、生涯忘れられない記憶を形づくっていったのでしょう。

川上から流れてきた小犬の物語は「犬こむかし」（花咲か爺）、蛇が嫁取りにくるのは「蛇むかし」（蛇婿入り）、地藏に笠をかぶせてやるのは「地藏むかし」（笠地藏）というぐあい

に、語り手が話の内容と関連させた題名をつけて記憶することもあります。

- 「ドンブラッコ、スッコッコ」（桃太郎）
- 「実のある香箱はこっちへ来い、実のねえ香箱はそっちへ行け」（花咲か爺）
- 「この枝か、もっと上、この枝か、もっと上」（猿媚入り）

など、聞き手の印象に残っているリズムカルな言葉や感動的な場面も記憶には欠かせません。

年中行事や祭り、登場する人物（動植物）、場所、生活体験、教訓など、身近なことに結びつけて語を記憶することもあります。語り手は語り始めると、語を聞いたところが思い起こされ、そのときの部屋のように語り手の顔まで思い出されると言います。「雪女」の語と実際の吹雪の晩の恐怖とをかさねて語る語り手もいます。

昔話の記憶法は、昔話のよみがえりの方法であると考えられます。聞き手の興味の中心や、語りの記憶法を理解することは、昔話の持つ機能をとく手がかりにもなりそうです。

2-10. 昔話の中の唱え言と歌

昔話には唱え言や歌が出てきます。

「猿蟹合戦」では、「早く芽が出ろ、柿の種」「早く木になれ柿の種、木にならなけりゃ、はさみではさみきるぞ」「なるかならぬか、ならぬものなら、はさみでちょんぎるぞ」などとうたわれています。これは柿の木などをなたできずつけ、実り多きことを祈る「成り木責め」という小正月の行事の唱え言とかさなります。

「かちがち山」には、「一粒は千粒になあれ、二粒は万粒になあれ」という唱え言が、歌のように盛りこまれています。これは一年の豊作を祈る「田打ち正月」「庭田植え」の行事の唱え言とかさなります。

また、つぎのようなリズムカルな語りかたもあります。

- 「ドンブラッコ、スッコッコ、小さい桃はあちゃ行け、大きい桃はこっちや来い」（桃太郎）
- 「そっちの水はかれえぞ、こっちの水はあめえぞ、こっちこう、こっちこう」（瓜子姫）
- 「舌切り雀どな、お宿あどこでござな、ちゅんちゅん」（舌切り雀）
- 「猫さえござらにや、世の中じゃあ、カッタンコー、カッタンコー」（ねずみ浄土）
- 「アウチュウチュウ、コメチュウチュウ、コガネサラサラ、キミノオイワイ、チチン、ポロポローン」（鳥呑み爺）

男女の歌のかけあい形式の「山田白滝」、和歌にこめられた謎をとく「播磨糸長」「西行と小僧」などでは、和歌が詠まれます。山形県の「子守歌のしらせ」では、娘の子守歌によって難題をとき、めでたく結婚します。岩手県の「たにし長者」では、「つんぶん つんぶん まめつんぶん カラスというばかりに ざっくりもつくりさされた」という歌が独立してわらべ歌になっています。

昔話の中の唱え言や歌は、語りにアクセントをつけるばかりでなく、語りを忘れさせぬための知恵でもあったようです。

